

「HSK 季刊わたぼうし」 第33号

発行者:わたぼうし連絡会  
発行日:1994年(平成6年)5月5日 '94 春号

～北陸障害者定期刊行物協会～

第33号のテーマ 平井誠一氏のフランス旅行記

山桜さいてみせよう 平和の花を

作：マツ子

この機関紙は障害のある人、ない人が自由にそれぞれの考えを出し合い、主義、主張を超えて、お互いを理解し合う中から共に生きる豊かな社会を作っていくことを目的として発行しています。

## 平井誠一氏のフランス旅行体験記

さて、今回私がフランスへ行くことになったのは、私たちの団体「全国障害者解放運動連絡会議」が反差別国際運動の理事の一人として参加しているためです。私は、理事の代行として今度で3回目の会議の参加です。以前はアメリカとフィリピンで行われた総会と理事会でしたが、今年の3月に国連のNGOとして認められて、より活発な国際的な活動を繰り広げているところです。

そんな中で今年は国連が決めた国際先住民年です。いまの時代にこの先住民の問題が取り上げられたのも世界の中で先住民の立ち上がりとし先住権・自決権を取り戻したいとする強い願いがあるからだと思います。

### ストラスブールの街

フランスのドゴール空港からさらに飛行機で1時間でストラスブール空港に着いた。ストラスブールは、フランスの東にあり、ドイツとの国境まで車で10分ぐらいのところだそう。

街は1800年代の石造りの建物が多く、ドイツに占領されたことや国境の近くということもあってドイツ様式の建物も多くある。人口は24万人と小さい都市だが、フランスの大学の多くがここにあるとのこと。だから若者が多い街であるが、ここにはもう一つECの欧州協議会があります。(ここでセミナーが行われました。)ヨーロッパの中心の場でもあるわけです。

フランスといえばワインが有名ですね。ここでもブドウを作っているのですが、かなり郊外にそのぶどう園がありました。主食はジャガイモだと聞きました。日本的に言えば肉ジャガとでもいうのでしょうか、それが食べておいしかったです。また、食べ物ではキャベツを細かく切りそれをワインで煮たものをつけて、それに豚肉の厚切りのステーキが3枚とソーセージの大きいものが2本ついているもの、フランス語での名前は覚えられませんでした。これがこの名物だそうですが、なんととってもワインがおいしかったですね。食前に一杯、食事中にもう一杯、このワインは食前と食事中に飲むものは違います。

会議が終わった後、ストラスブールにある日本料理店に行きました。どこの国にも日本料理店がありますが、ここに入ったとき何となく日本的というより、外国なまりの日本店という感じがしました。そこでなんとうどんすきを食べましたが、ここで経営している人(?)はベトナム人でした。けっこう地元の人も食べに来ていましたので日本料理も人気があるのかなと思います。

夜の街を歩きましたが、今この街では公害がひどいので市電を作っているという事で街の中を掘り返していました。昔は市電があったらしいのですが、また市電が見直されて走らせることになったらしい。富山の街と同じで夜7時ぐらいになると町の中を歩く人が少なくなるのですが、私が心に残ったのは街の一角からアコーディオンの曲が聞こえてきたことだ。よく映画の中で見た光景だと思いうれしくなった。こうした大道芸人はここでは多くいるらしいが、私が出会ったのは一人であった。

## Struthhofの元ナチス強制収容所への視察

さて、私たちは最初の入り口にあった収容塔に向かって下りてきた坂を上がった。一番下の建物から最初の収容塔には6棟ぐらい合ったのであろうか。そんなに広くない敷地に1万人もの人たちがいたというのが、重なり合っただけで眠っていたのであろうと思うと人権や自由などと言うこととほど遠い死への道をただただ突き進まされていた毎日だったのであろう。

入り口に近い一番高台には処刑用の死刑台がある。首つりである。ナチスはクリスマスの日には2つのクリスマスツリーを飾ってそのツリーに人を首つりにして飾ったという。収容者が働いて帰ってきたときにそのツリーの間を通らさせられたという。首つりをさせられてツリーに飾られた二人の間を通らせて見せしめとしたのだらう。

この死刑台は、見せしめのためのものであり高台でどの塔からもわかるように死体が腐ってもそのままにしてあったという。この入り口の収容塔には、ナチスの写真や収容所などの写真などが展示してありました。また、衣服や収容所に強制的に連れてこられた人たちが描いた絵やメモなど数多くのものが保存してありました。

その中でも我々がよく見る写真やひどくて見るに忍びない写真など、人間が人間を殺すことに対してこれほどの非人道的に葬り去った歴史を目の前にして、恐ろしくなる思いでした。この世の地獄という表現がありますが戦争を知らない私ですがこの収容所の視察からは、これまで聞いたりテレビなどで見たときよりも、もっと強烈に恐怖というものを感しました。

## フランスの障害者の家を訪問して

彼の名前はドミニックさん。彼と最初に話したのは、お互いに国の障害者の現状である。フランスでは20歳以上の障害者に対して国から月3,000フラン支給されるそうだ。1フランが日本円にして18円から20円であるから54,000円から60,000円になる。これは日本で言う障害者基礎年金になるのだらうと思って聞いていました。これは家賃に消えているほどの額で、ほとんどの障害者は在宅しか選択できないという。

このほかに介護のいる障害者に対して、月4,000フラン支給されるそうだが施設にいるときはそれで介護者に支払い、帰宅したときに初めて自分のものになると話す。つまり施設から家に帰ったときは介護者に支払わずに、家族の介護を受けるという意味だと思えます。1日あたり130フラン、日本円で2,500円ぐらいかなと思いますが、介護料が支給されるそうです。

## 第19回全国わたぼうし音楽祭作品募集要項

### 「作詩の部」

3月31日に締め切り終了。

### 「作詩、作曲の部」

テーマ、形式自由。作詩、作曲で1作品とします。ただし、作詩はハンディを持つ人に限られます。作曲はハンディの有無を問いません。ひとり3点まで。

### 締め切り

1994年5月31日(必着)

### 注意事項

- ・作品は未発表のものに限ります。(詩集不可)
- ・『作詩、作曲の部』の作品は必ずカセットテープに録音し、歌詞を添えてお送り下さい。(楽譜のみ不可)
- ・応募作品は返却いたしません。
- ・著作権は主催者に帰属します。
- ・『作詩、作曲の部』の入選作品については、歌唱の都合上、補作編曲することがありますので御了承下さい。
- ・『作詩、作曲の部』の歌唱については、主催者と作詩者・作曲者との協議のうえ決定します。
- ・応募者は応募用紙に必要事項を記入のうえ、作品に添えてお送り下さい。

### 選考方法

- ・『作詩の部』(締め切り済み)は審査委員会で入賞作品10点を選び、本人に通知し、賞状、記念品が贈られます。
- ・『作詩の部』(締め切り済み)の作品は、作曲を募集します。曲のついた作品は『作詩、作曲の部』の応募作品とあわせて審査委員会が予選を行い、音楽祭当日に発表される10点が決められます。
- ・音楽祭では、運営委員会が委嘱した審査員で本選が行われ、「わたぼうし大賞」「文部大臣奨励賞」などの各賞が決定されます。また、それぞれに賞状・記念品が贈られます。

なお、大賞曲は、'95年に上海で行われる『第3回アジアわたぼうし音楽祭』の日本代表曲となります。

### 発表方法

- ・7月上旬に毎日新聞の紙面を通して発表します。
- また、直接結果を知りたい方は、応募の際に80円切手を同封していただければ、7月上旬に入選結果を郵送にてお知らせします。

## 応募先&問い合わせ先

〒630 奈良県奈良市六条西3-25-4

奈良タンポポの会内

全国わたぼうし音楽祭運営委員会

電話：0742-43-7055

FAX：0742-49-5501

担当：坂井靖&小園優子

**=知っていますか？ 受けていますか？ 知人や友人にも教えてあげよう=  
日常生活に役立つ福祉サービス制度**

日常生活におけるハンディ緩和の一助として様々な福祉サービス制度が用意され多くの方々がその恩恵を受けながら日々過ごされています。しかし、それは入院先の先生や友人からの紹介により知ることができた限られた人たちであり、一方では長い在宅生活や組織に属していないため、折角の制度を知る機会なく過ごされている方が数多く存在し、情報が隅々まで行き届いていないのが現状のようです。

ここでは、少しでもそういう方々に制度を知ってもらい、そして利用していただけたらと思い、関心度の高いものを抜粋して略式で掲載していきます。

皆様のより良い暮らしのお手伝いになれば幸いです。

### 《年金と手当》

#### 国民年金障害基礎年金

- ・1級:年額 921,600円(平成5年度価格)
- ・2級:年額 727,300円(平成5年度価格)

#### 特別障害者手当

(在宅の重度障害者に対する所得保障制度)

- ・受給の条件
  - (ア)年齢が20歳以上であること。
  - (イ)病院に3ヶ月越えて入院していないこと。
  - (ウ)施設に入所していないこと(通所施設を除く)。
  - (エ)おおむね重度の障害が二つ以上あること。

支給の額 月額 24,230円

◎上記条件(エ)では細かな規定がありますが、例えば四肢麻痺の場合、両下肢と両上肢で二つになります。

◎特別障害者手当に該当する方は、国民年金基礎年金とあわせると月額約101,000円が受給できます。

## 特別児童扶養手当

日常生活において常時の介護を必要とするか、ひとりで生活できない状態にある20歳未満の児童を療育している者に支給。

### ★支給の目安

身体障害者の等級が1~3級及び療育手帳AまたはBの一部の人がおおよそ該当。

## 児童扶養手当

通常は母子世帯に支給される。

支給の額 児童一人 月額 38,220円

二人 月額 43,220円

3人以上は一人につき1,000円加算。

## 生活福祉資金

経済的自立を図り安定した生活が営まれるための資金貸し付けの制度。

※住宅資金

※更生資金（生業費）

などの他にもいろいろな資金があります。

## みんなの広場

### 社会講話より

### 地域住民・肢体障害（会社員）

みなさん、こんにちは、私は名前をR.Nと言い、金沢市に住んでいます。見てのとおり私も皆さんと同じ身障者です。私より皆さんの方が障害が軽いようですね。どうでしょうか？何もできないようでも私は毎日会社へ行って仕事をしています。何をしているかと言いますと、コンピュータで納品伝票を書き、毎日の仕入れ売り上げの整理をしています。健常者のように早くできませんが、極力頑張っています。

私は生まれて8ヶ月の時に熱病が原因で脳性小児マヒ(アテトーゼ)にかかり、小学校も現在のような特殊学校はなかったので、2年間遅れて普通の健常者の子供と一緒に入学し、最初は母親におんぶされて学校へ通いました。体操の時間は無論のこと、音楽・習字・図工、それにそろばんの時間等、他人にはわからない苦勞がありました。それでも私は皆に負けたくないで、時間に間に合わない分は家に持ち帰って仕上げ、次の日黙って学校に持って行きました。担任の先生の理解と指導もよかったです。クラスの友だちは全員が協力的でイジメもなく助けてくれました。

しかし、いったん校門を出ると、そうはいきませんでした。私の歩く後ろから身障者の行列ができました。他の子どもたちが私の真似をして、口を歪め、手足を曲げて歩くからです。いや～な思いをしている時、クラスの友だちは必ず助けてくれました。好きでこんな格好しているんじゃない、この身になってみいって。

小学校三年の時からは一回り大きな三輪車を作ってもらい、友だちと一緒にそれに乗っ

て学校に行きました。やがて小学校を卒業し中学校へ入学しました。あとで聞いた話ですが、その時先生方は大変悩んだそうです。教室が3階なのと、重度の身障者を入学させた前例がないから扱い方がわからないってことで、私の先にもアテトーゼの方がいたと思うのですが、学校へも行かせず家で隔離状態にしていたのではないのでしょうか？

中学校で一番困ったことは避難訓練でした。3階からいつ刻を争って階段を降りなければなりません。段を踏み外して転んだり、内履きの靴がどこかへ飛んだりして大変でした。そのようなときでもクラスメイトは男女の区別なく必ず力になってくれました。何十年経った現在でも、道で会えば声を掛け合って元気であることを喜び合っています。このことは私にとって非常に幸せなことで、後々の生活の考え方の基礎になったものと感謝しています。

ところが、高校入学では一時間ごとに教室が変わるから危ないということと前例がないことを理由に断られ、定時制に回されてしまいました。これはかなりのショックでした。小学校・中学校と周囲の友だちに囲まれて自分が障害者であることすら忘れて、同等以上に勉強して入学試験を受けたのに、その学力全く無視され、始めて重度障害者としての悲哀を受けさせられました。それでも4年間、毎日高校に通い、卒業式には特別に表彰状をいただきました。高校卒業後は、石川県身体障害者更生指導所に入所してラジオ科で一年間、電気の方を勉強することになり、ここで始めて身障者の仲間に出会いました。皆さん真剣に社会復帰を目指して頑張っているのですが、私はしばらくの間理解できませんでした。学校の間は身障者と付き合いがなかったので、相手の方が何でもできるものだと思っていたのです。そこで自分と同じ障害の方に出会いましたが、世間から私を見る眼がこんなものかと思ったら敵対意識が働いてしまい仲良くできませんでした。それでも、ここでの一年間は私を大きく変えました。習得した技術は私を満足させませんでした。まだ金沢にテレビ局のない時代でしたが、テレビの技術を覚えたくて大阪の技術学校へ一人で行き、勉強しました。その頃のテレビは東京と大阪のNHKだけで丸いブラウン管の真ん中に四角写っていました。もちろんカラーではなく、モノクロでした。

大阪でテレビ技術を習得後、金沢に帰り、私の実家の方でラジオ店を開き、あちらこちらのラジオを数多く修理しました。当時は現在と違い、電気製品といってもラジオが主力で、あとアイロンか電気スタンド位しかなく、それに電球とソケットと電池位しかない時代でした。そのラジオも現在の小型テレビ程の大きさで、部品も大きく修理しやすいものでした。

その内に洗濯機や炊飯器・テレビ等が普及し始めました。当時のテレビ・ラジオは真空管を使っていたので、故障が多く出張修理によく出かけました。ところがある家では私のような重度障害者では逆に壊されては困ると頭から断られたこともあります。それでも修理ができて、お礼を言われ感心されたときに誰にも言えない喜びがありました。しかし、テレビにはアンテナが付き物ですが、アンテナの故障の時は屋根に昇れないので、修理できずに帰ってきたこともあります。また複雑な修理の場合預かってこなければなりません。そこでバイクの横に側車をつけてもらい、そこに荷物を乗せて運びました。でも免許はなかなか取らせてもらえませんでした。これも学校の時と同じく、前例がないから責任が取れないと言われ、それじゃ、無免許で乗るからと言って少しの間、無免許で街を走りました。今は考えられないことですが、知っている警察官は見てもないふりをしてみたい

です。それでも何時までも無免許で走るわけには行きません。

万が一事故を起こしたら免許を返すからと、再三頼んでやっと自動二輪の免許を習得しました。そして数年後、普通車の免許を取ったのですが、この時も又他県にあっても石川県には前例がないと言われ、半信半疑で試験を受けさせてくれました。自動車の免許を取ってからは、自分の想像以上に行動範囲が広がりました。大事な荷物が雨や雪が降っても、大丈夫になりました。私の運転は、どんなことがあってもマイペースで走ることです。多少遅れても、後ろの車から文句を言われても、疲れている時、体調の悪い時はゆっくり走ります。事故は起こしてからでは、何を言っても始まりません。事故ほど悲惨なものはありません。自分の家族だけでなく相手の家族にも多大な迷惑をかけることになります。

話は変わりますが、私は会社で電話の対応もしていますが、これが私にとって大変なのです。電話だから相手が見えません。電話をかけられた方は私が障害者で言語障害のあることを知りません。私はていねいにゆっくり話しているつもりでも相手の方に判ってもらえません。何度も繰り返して話をするのですが判らず、しまいには怒り出すんです。もう少しはっきりしゃべれとか、酒飲んでいるんじゃないかといって電話をガッチャーン!その時は一瞬こちらもカァッときますが、自分が悪いのだからと我慢しています。けれども全部がそういう人たちではありません。

「捨てる神あれば拾う神あり」で社会の人はそんな冷たい人ばかりではありません。以前のテレビ番組に「やってやれないことはない、やらずにできるはずがない」というのがありましたが、私はその通りだと思うのです。できないから何もしないというのは、人間社会の一員として、あまりにも惨めだと思います。

いくら頭の良い人でも、体格の立派な人でも最初から何事もできるはずがありません。

全員、それなりに苦勞して現在の仕事に従事しているのです。私はこれからもまだまだ頑張ります。皆さんと共に、毎日を明るく朗らかに過ごして行きたいと思います。

## 親の目、家族の目、社会の眼

## 地域住民・肢体障害

数年前に私が代表している「かめの子の集い」でエド・ロングさんというアメリカの障害者を招いて講演会をしたことがあります。

ご存じかも知れませんが、アメリカの多くの家庭では家族一人一人が幼い頃から何らかの役割を担っています。

重い筋ジストロフィー障害者のエド・ロングさんも例外ではなく、母親は彼に食事のあとの家族のお皿を洗う仕事を与えました。

当初は障害の重い彼は皿やコップを落として割ることも度々でしたが、そんな時でも母親は決して手を貸さなかったと云います。

それを聞いたとき、私は日本とアメリカの子育ての違いを感じました。アメリカの家庭では子供を育てるとき、わが子と言えども社会の一員という意識が父母の中にあり、それは重い障害児を養育するときでも例外ではありません。

それが家庭や社会の中で何らかの役割をするのが当然であり、幼少の頃から社交性や奉

仕活動を重視し、個々の人間性を尊重する精神に結びついているように思います。

しかし、私たち日本人は我が子を見るとき、家族や肉親的な関係でとらえることが多く、特に障害児をかかえる親は我が子が重い障害を持って生まれたとき、あたかもその不孝を我が身の責任のように感じ、無意識のうちに親子の関係も溺愛的な感情で見えてしまう。

その結果、親が障害の重い我が子を見るとき、親や家族と云った従属的な主観だけでその関係をとらえることになり、障害を持つ我が子も社会のなかの一員だという意識が子育ての中で希薄なように思います。

そうした日本とアメリカの子育てに関する認識の違いを端的に示す一例として親子心中があります。

例えば、日本では重い障害児を抱える母親がその肉体的、精神的破綻から死を選ぶとき子供を道連れにすることが多く、新聞やテレビなどのマスコミも大抵は同情的な記事を書くことが多いような気がします。

しかし、アメリカでは親子心中の比率は低く、また、母親が我が子を道連れに自殺をしたら社会的にきびしい非難を受けます。

そこには国民の多くがクリスチャンという宗教的背景もありますが、幼い子供や重い障害者も一人の人間、社会的な存在としてとらえる基本的な意識がアメリカ市民の生活のなかに伝統的にあるからではないでしょうか。

だが日本では、子供を家族や一族的な関係でとらえ、親も子も分身的、隷属的な視点で見る事が多く、そのため我が子と云えども固有の人間性を持つ一人の社会的な存在だとする意識や認識が弱いように思います。これは単に障害児を持つ親だけではなく、一般の人たちの子育てにも言えます。

しかし、私は障害児の親だからこそ、どんな重い障害児も社会の一員だという積極的な意識を持って欲しいと思います。

なぜならそうして視点で障害を持つ我が子を見ることにより、少なくともその障害を単に悲しむのではなく、客観的に現実を肯定し、子供を持つ可能性を医療を含めて総合的にとらえ、その潜在能力を発見し、それを伸ばし社会の一員として自立の基本姿勢を学ばせ、親としてそれを援助するという積極的な意識が生まれるのではないのでしょうか。

そのために障害を持つ我が子を幼いころより近所の子供たちと遊ばせ、一般の幼稚園などに入所させるなかで、障害児を持つ父母は意識的に周りの人々と関わりを持ち、そのなかで重い障害を持つ子供も地域の一員なのだと言うことを具体的に理解し、障害のある子供を家庭に内蔵するのではなく、隣近所や地域の多くの人たちと一緒に我が子の障害や教育の問題を考えていくことが大切ではないのでしょうか。

そうした意識と活動するなかで重い障害児を持つ父母が親の目、家族の目から離れて社会的な目で存在を見ることが出来ると私は思います。

## 施設

## 地域住民・肢体障害

行こうと思っていた施設に行けるようになりました。なかなか行けないので、阿部さんと行ってきました。東富山へ行き、ハイヤーで施設へ行きました。

そこは、地域社会に隔離されています。まわりは田んぼです。そこは障害者の小さな村みたいなところ。近代的な建物で、そこに入っている人は、なんにも考えさせなくさせられている。

そこは高志学園とか、リハビリ病院とか働くところとか、生活をやっていくところとか、そこに一生涯います。私の友だちの谷口さんはそこにいます。

私と一緒に高岡の施設にいた鈴木くんは障害が重くなって脊髄を手術しました。谷口さんと3人でお見舞いに行きました。

鈴木さんはとても喜んでくれた。高岡で一番仲が良かった3人で、一緒に働いていた仲間です。12年ぶりにあって大きな声で話がもりあがった。とってもなつかしかったです。障害が重くなっていても、施設から出て生活できるような社会を作っていきたいと思う。

今、私がやっていくことがいい、少しでもこんな生活をできるように考えていきたいと思えます。

そこであらゆるものを活用していかなければならないと思えます。まず友だちとヘルパーをたくさん作りたい。

### 『季刊わたぼうし』全国に放送される。

NHKラジオ第2放送の大坂放送局製作の福祉番組「心身障害者ととともに」へ「季刊わたぼうし」を毎号送付しています。

去る2月27日(日)放送の番組のなかで、32号に掲載されたTさんの記事「障害者と施設」が全国に向けて放送されました。

これを励みとし、今後とも充実した内容をお届けしたいと思えますので、皆様のご協力をお願いします。

### お知らせ

この「HSK季刊わたぼうし」を利用して俳句、川柳、詩、マンガ、エッセイ等を発表してみませんか？ なんでもOKです。どしどしご応募してください。

「季刊わたぼうし」第32号より、みんなの広場「自分の生活を反省する」を読んで、私なりに身のまわりのことを思い浮かべ、考えてみました。

まず、日常生活での他人との関わりとは、親しい友人から、近所付き合いといった人間関係で、社交上これ程難しいものはないといえる。ある雑誌では”自分という存在が自分みずからの手で嫌になり、投げ出したくなることがあるが、多くの場合その気分は、対人関係の中から生まれる”と書かれてあった。が、これは大人だけでなく、子どもたちの世界でもありえる事。過去、養護学校の中学高等部と寮生活をした事のある私にも、同輩以外の友人にも腹を立て通した時があった。

(但し、片方ばかりが悪いのではないが、今も(20年以上経つというのに、)まだ忘れられないでいる。

そもそも、世の中のルールとは決められた事を皆で守る。協力しあおうという気持ちです。ところが、ここで問題なのは、害の出ない正しい方法を知っていても「自分一人ぐらい、いいじゃないか」という個人主義者がいることです。そうなると害は出て当然です。

例えば、ゴミの出す日は守らない。私の住んでいる志賀町では、今年の4月からゴミ袋にシールを貼って出すようになった事で量は減った。特に粗大ゴミとなると300円のシールを買わなければならない為か、出る数も少なくなったと聞いている。だがその反面、代替物として海岸付近に放棄してあるのを目にすると情けなくなる。(町内でもわが部落だけなのでしょうか?)。また、新しい下水道へ流してはならない物を平気で流すなど。

そして、ことは汚い話になりますが、以前はどこの家にも肥料の溜め桶があって田畑に使用しましたが、今は水洗トイレの時代で、化学肥料を普通としています。ところが、風習から抜け切れないのか、打算的に考えているのかわかりませんが、(水洗になっているにもかかわらず)時折、くさい臭いをそよ風と共に家の中に入れてくれるのです。それも場所は私の部屋の向かい。去年も父が亡くなる直前に平和的な話し方で「どうにかして欲しい」と依頼しましたが無駄でした。このことは我が家だけではなく、近所中が困っている事柄なのです。これらを諺で言うなら「知りて行ざれば、知らざるに等し」と。考えてみれば人間が公害を出しているのですから、せめて自分でやらなければ(守らなければ)と気づいたら早速実行すると。そうすることで、初めて平和な社会での楽しみや自由が出て来るのでは?と思えるのです。

「自分の生活が社会に影響を与えたくない」とは、他人に迷惑をかけまいという気持ちからなら、それは誰もが思っていることです。仮に障害が重く介護者を必要とするにしても、マナーを心得て生活していく上での常識を守っていこうとする気があるなら、それでいいのではないかと思うのです。私が普段気づいていることを書かせていただくと共に、配慮したく思っております。

## パソコン情報室

「すべての人」にやさしい未来をめざして —TRONプロジェクト—

地域住民・公務員

私たちの毎日の暮らしは、数多くの電子機器に囲まれています。

これからも、こうした電子機器はどんどんと増えていくでしょう。

ところが、こうした電子機器のなかには身体に障害を持つ人にとって、きわめて使いにくいものもあります。

たとえば、銀行の現金自動支払機のなかには、画面に直接さわって操作するものがあります。目が見えない人にとって、この操作はまず不可能でしょう。

また、テレホンカードやオレンジカードなどのプリペイドカードは、さわっただけでは区別が付きません。

これからの生活が、ますます電子機器に囲まれていくなかで、障害を持った人の社会参加が妨げられたり、生活そのものが困難になってしまうかもしれません。

TRON(THE REAL-TIME OPERATING SYSTEM NUCIEUS)プロジェクトは、1990年代から来るべき21世紀の技術水準を前提とし、近い将来、人間のあらゆる生活場面において使われることが予想されるコンピュータなどの電子機器の理想的な姿を追求するプロジェクトです。

TRONプロジェクトでは、身体のさまざまな障害や国籍、年齢を問わず「すべての人」が使いやすい電子機器に囲まれた、「すべての人」にやさしい未来をめざしています。

障害者は“DISABLED PEOPLE”と呼ばれることがあります。“DISABIED”とは、「無力にされた」という意味です。TRONプロジェクトでは、こうした身体上の障害によってさまざまなことに対して無力にされている状態を、コンピュータなどの電子機器の技術によって「可能に(ENABIE)し」たい、という願を込めてイネーブルウェア(ENABIE WERE)と名付けました。

イネーブルウェアは障害者をサポートする仕様(ヒューマンインターフェイス)のことで、1987年から障害者の方々を含むTRONイネーブルウェア研究会により検討された結果生まれました。障害者でもできるだけ健常者と同じように、コンピュータや電子機器を操作できるように、多くの工夫がなされています。

こうしたことは、マスコミに取り上げられることも少ないので、ご存じない方も多いと思います。

「すべての人」にやさしい未来をめざす、こんなすてきなプロジェクトがあることも知って欲しいのです。

参考：TRONやイネーブルウェアに関しては「[「電脳激動」坂村健\(日刊工業新聞社\)をご覧ください。](#)

## 「嫌われボランティア」シリーズ1

- その① 「やってやる！」 ボラ 無償で「やってやるのだ」という顔をして相手の誇りを傷つける。
- その② 「わたし」 中心主義 対象(活動)何を求めているかよりも、自分の生き方、活動への興味、活動の仕方を中心に考えて行動する。
- その③ お遊びボラ まるで遊びにグループに入ってきたような人、活動を遊びだと思っている。
- その④ お返し拒絶ボラ 対象からのいかなるお返しも拒絶「いいのよ。私たちボランティアなんだから」

「ボランティア情報紙より」

## 年間協力会員募集中＝

この機関紙は障害のある人、ない人がそれぞれの考えを出し合う中から、互いに理解を深め、共に生きる豊かな社会づくりを目的として、有志により発行しています。

つきましては、主旨に賛同して協力会員になっていただく方々を募集しております。

この会費は、在宅障害者宅や福祉関係施設等に送付していますので、機関紙一部の料金ではなく、主旨に賛同していただいている方々の年間協力会費として扱っています。

会費：年間2,000円 送付：年4回(春・夏・秋・冬号)

## 事務局だより

今回より「HSK北陸障害者定期刊行物協会」のタイトルが表題につくことになりました。これは、郵送料の軽減を図るため、いくつかの団体が集まり、一つのグループを作り、このグループが名義上の発行人となるものです

編集者及び主旨等は従来と全く変化がありませんのでご理解の程お願いします。今後ともよろしくお願いします。

NO.34のテーマは「電話」